

第3分科会
重複障害のある子どものアセスメント
－見え方とコミュニケーションに関する初期的な力の評価と支援－

司会者及び話題提供者

齊藤由美子（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

中澤 恵江（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

第3分科会では、まず司会者の齊藤より、本分科会の趣旨と内容について説明を行った。

本題として、重複障害のある子どもの見え方のアセスメントについて研究成果の報告があった。

まず、中澤より見え方の評価について、検査キットの実際を紹介し光に対する反応を評価する方法について説明された。特に、中枢性視覚障害の特徴を踏まえ、そのアセスメントの意義と指導による状態の改善について話された。

次に、齊藤より重度・重複障害児のためにアセスメントの開発について、「アセスメントの作成に配慮したこと」、「視標の選択」、「アセスメントに際しての配慮事項」、「アセスメントの実際」についての説明がされた。

***演習1：「見えにくさの疑似体験」**

参加者全員が6人一組のグループとなり、ビニール袋をアイマスクのようにして弱視を疑似体験し、アセスメントのツールを使って互いに「見えにくさ」を実感した。

【参加者からの感想及び話題提供者からのコメント】

（参加者より）・布を揺らしてみたときに、早く動かす方が見やすい人と、見にくくなる人がいた。子どもの場合も、それぞれ特徴があるのだろうか、と実感した。

（中澤より）@アセスメントは一度でなく、1年後くらいに再度行うことが大切

（参加者より）・縞を縦にするか横にするかで見え方が違うことに気づいた。

（中澤より）*疑似体験は、子どもと「同じ見え方」ではない。「子どもの見えにくさに少し近づく」ことが、この活動のねらい。

*疑似体験は、複数で行うことが大切

中澤より、見え方のアセスメントについてのまとめとして、「評価結果を支援につなぐこと」、「光覚の大切さ」、「色がわかることの大切さ」について説明された。

続いて、齊藤より実践事例がふたつ紹介がされた。

1)聴覚中心のかかわりから、見える色の活用と「まぶしさ」への配慮を行った事例

2)蛍光色が見えることがわかり、視覚を使って楽しむ美術の授業に取り組む事例

次に重複障害のある子どものコミュニケーションのアセスメントについて研究成果の報告がされた。実践につなげやすいコミュニケーションの評価として、「やりとりの芽生えと展開アセスメント」について齊藤より説明がされた。

演習2：「弱視・難聴の疑似体験」

グループ半数が、弱視・難聴の状態になり、グループで一つのテーマで話し合いをし、その体験のふり返しを行った。

【参加者からの感想】

・不安な気持ちになった。フリートークだともっと不安だったろう。順々に話したので、近づいてくるのが予想できた

・以前勤めた盲学校で、弱視の生徒に全盲の生徒が「空気が読めない」と言われていたが、その気持ちがわかった。

・引きこもってしまう、のを実感した。

・順番がわからなくて不安だった。

・誰がしゃべっているかわからない。それが不安だし、自分に話しかけられていることすらわからない。

- ・自己紹介しなかったので、名前を呼ばないと、誰に向けて話しているかがわからなかった。声の特徴で判別することも、わかりやすい人とそうでない人がいる。
(中澤より) @朝の会で「今日はどの先生がいるか、いないか」が子どもはわからず不安になることも想像できるのではないだろうか。

齊藤より「やりとりの展開にかかわる基本的配慮」について、中澤より「コミュニケーション方法の発達的な変化について」説明がされ、特に、「生活の中で築かれたコミュニケーションの土台」を掘り起こし、それを意図的に使っていくことが重要であると教育相談の例を挙げて説明があった。

次に、齊藤より「アセスメントの結果を活用したコミュニケーション支援のポイント」について説明された。それは、「パートナーである大人の役割が重要であるということ」、「環境の文脈も大切であり、その環境をいかに整えるかが大事であること」、「基本的要素を保障する支援であること」、「豊かなコミュニケーションを育むための支援であること」であると述べた。そうしたポイントを踏まえた実践事例の紹介がされた。

最後に参加者からの質問として出された「実践事例で紹介された、見え方のアセスメント（Y君）の見分け方を詳しく教えてほしい」に対して、齊藤より担任との協働によりアセスメントしその後の指導を展開されたことについての説明がされた。そして、最後に中澤と齊藤より、謝辞に加え、本分科会の参加者が現場で実践されたアセスメント及び指導実践から、さらに新たな工夫や発見につながることを大いに期待していると述べられ、閉会した。